

第2章 「人間椅子」論

第1節 「人間椅子」の構造分析 —作中作としての「人間椅子」—

はじめに

江戸川乱歩の作風は多様であり、「人間椅子」はその着想の卓抜さで注目された短篇「探偵小説」である。大正14(1925)年10月に『苦楽』という雑誌に発表された「人間椅子」は、アメリカ探偵作家クラブの1961年度版短篇傑作集に日本人作家のものとして初めて収められた作品でもあり、乱歩の代表作と言える¹。

「人間椅子」の書き出しは美しい閨秀作家の佳子が、ある日一つの封書をもった場面から始まる。その封書にはある男の驚くべき告白が記されていた。作品の最後に明らかとなったが、実は、この告白こそ「人間椅子」と題する作中人物による一編の創作という、「作中作」の構成をとっている。「作中作」とは作品の中にもう一つ、もしくは複数の作品を内包する構造を持つ物語のことであり、そして作中作の一番の典型例が、かの有名な『千夜一夜物語』(アラビアンナイト)である。

『千夜一夜物語』は大臣の娘シェヘラザードが毎晩、ペルシアの王シャフリヤールに別の物語を語るストーリーであり、シェヘラザードによって語られるのが、「アリババと40人の盗賊」「シンドバッドの冒険」などの冒険・恋愛の内容を含む多彩な物語群である。乱歩の「人間椅子」もこのような入れ子構造(nesting)を有する作品であり、この場合、外枠のストーリーに当たる佳子の話は、「枠物語」として機能している。枠物語とは「別の物語に背景を提供することによって、枠として機能する物語²」のことであり、そして外枠の話に埋め込まれたのが、〈私〉という一人称の語り手によって書かれた書簡体の形式を持つもう一つの創作、「人間椅子」なのである。

乱歩はこのように作中作の手法を使い、巧みに外枠の部分を内包する書簡の部分と結びつけ、読者の心を宙吊りにすることに成功し、「人間椅子」という「探

¹ 長沢隆子「江戸川乱歩」長谷川泉編『現代文学研究 情報と資料』所収、至文堂、1987年、p.156。

² ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳『物語論辞典』、松柏社、1991年、p.69。

偵小説」の秀作を完成させた。

しかし、乱歩はどのように外枠のストーリーに内包するストーリーを組み込むのか。「人間椅子」は「探偵小説」の中に高い評価を得た作品であるが、それは文章の構成とどのような関連があるのか。この一節では構造の分析を通して上述の問題を明らかにしたい。

1. 語り手と焦点化の分析

1.1 外枠の部分について

「人間椅子」の外枠の部分は三人称の語り手を取り、佳子の背景と心境を説明している。冒頭部に佳子の身分と彼女の洋館などが紹介され、佳子という人物像が語られる。

佳子が一通目の封書をもらい、それを読み始めた時、「彼女は、そこから、何となく異常な、妙に気味悪いものを予感した」(p.608)。もともとその封書の内容は読者にとって、ただ一つの未知なものである。しかしここで、語り手が佳子の気持を「異常な、妙に気味悪い」と描写している。つまり語り手はこれから展開する話が異常で、気味悪いということをあらかじめ読者に予告しているのである。そうすると、読者はこれから読みはじめる封書の内容が異常であるということをあらかじめ予想するのである。

また、佳子と一緒に封書の内容を読んでいくうち、読者の視点は自然に佳子の視点と重なる。廣野由美子は『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』において、「視点」という用語を用いず、代わりに「焦点化」(focalisation)という用語を提唱している。その理由は次の2点による。

第一に、「視点」というのはもともと美術用語で、視覚的な意味に偏る傾向があるが、語り手が語る内容は、見たことだけでなく、聞いたことや考えたこと、推測したことなど、さまざまな認識手段による多面的情報が含まれる。第二に、語っている位置と、眺めている人の位置とは、必ずしも一致するとはかぎらない³。

以上に提起された二つの理由で、廣野は人称の問題と視点の問題が混同され

³ 廣野由美子『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』、中公新書、2005年、p.34。

ることを避けるために、視点の代わりに「焦点化」という用語を使っている。さらに廣野は「見ている主体を「焦点人物」(focalizer)」と名づけ、そして「焦点人物が物語世界の外側にいる場合を「外的焦点化」、焦点人物が物語世界の内側にいる場合を「内的焦点化」という」と補足説明している⁴。

「人間椅子」の外枠の部分に即してみると、三人称で佳子の背景と心境を語る部分は「外的焦点化」に属しているが、佳子の目を通して手紙を読むなどの場面描写は「内的焦点化」の場合が多い。そしてその時の焦点人物は佳子が中心である。

普通、読者は三人称の語り手よりも、一人称の語り手と共鳴しやすい。そして内的焦点化の場合において読者は作中人物を通して、さまざまな情報を獲得するので、その効果は一人称による語りと似ている。つまり、内的焦点化人物の佳子と心情に同調した読者は、封書を読み終わったら、自然に佳子と一緒に悪寒を覚え、烈しい恐怖に襲われるだろう。そして、二通目の封書を読み終わったら、読者も佳子と同じ、一通目の封書とはまったく違う驚きを感じるようになる。

このように乱歩は巧みに書簡体を利用し、内的焦点化人物の佳子を通してストーリーを展開させていく。そしてこれから展開する物語はかなり不思議な内容をもつものと予告し、読者はこの布石により自然と好奇心が喚起されるのである。

1.2 作中作の部分について

作中作は主に〈私〉という一人称の語り手を通して、その〈私〉の異様な行為と心境を女主人公の佳子に告白するという内容である。まず、文中において語り手の〈私〉は全編に渡って佳子に敬語を使っていることが指摘できる。この点から見れば、語り手の〈私〉は自分の身分が佳子より低いと考えていることがわかる。一通目の封書には家具職人の〈私〉が、大使夫人でかつ著名な女性作家である佳子に当てた手紙なので、全文を通して敬語が用いられるのは最も当然なことである。

そしてその一封目の封書の内容は〈私〉が椅子に隠れて、触覚、聴覚、嗅覚などの身体感覚を述べている。〈私〉という一人称の語りなので、読者は自然に

⁴ 注3 前掲書参照、pp.34-35。

語り手の〈私〉と一緒に目を閉じて、椅子の中で外部情報を感じとる。二部構成の「人間椅子」はこのように語り手の使い分けを通して読者の想像力を刺激しているのである。

2. ストーリーとプロットの分析

廣野由美子の『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』には、ストーリーとプロットの定義について以下の引用のように説明している。

ストーリー（仏：histoire／露：fabula）とは、出来事を、起こった「時間順」に並べた物語内容である。他方、プロット（仏：discours／露：sjuzet）とは、物語が語られる順に出来事を再編成したものを指す⁵。

以上の引用が示すように、ストーリーとプロットの内容は文学の構造分析の重要な一環である。一つの物語はプロットの巧みな配列を通して、様々な効果を生み出す。この一節では、「人間椅子」のストーリーとプロットの内容を整理し、分析してみたい。

2.1 外枠の部分について

まず、外枠の部分のストーリーとプロットを以下の表（一）にまとめておく。

表（一）「人間椅子」のストーリーとプロット（外枠）

※筆者作成

ストーリー
(ア) ある人が「人間椅子」という作品を書いた。
(イ) その人は二つの封書を佳子の家に送ったが、一通目が先に届いた。佳子は封書を読み始めた。
(ウ) 一通目の封書の内容には、ある男が佳子に驚くべき罪悪を告白する内容が書かれている。
(エ) 最初の封書を読み終わり、佳子は恐怖を感じた。
(オ) 二通目の封書が届き、佳子はそれを読んだ。封書には前に送ったものが「人間椅子」というタイトルの創作小説で、佳子の評を乞うために送っ

⁵ 注3 前掲書参照、p.9。

た旨が記される。

プロット

- 【A】 ある男が一通の封書を大使夫人・佳子に送った。(イ)
- 【B】 その封書には、驚くべき行為の告白が書かれている。(ウ)
- 【C】 その封書の中に出てくる夫人が自分であることを知り、佳子は驚愕した。
(エ)
- 【D】 佳子のもとに二通目の封書が届けられ、それは前の一通目の封書と同じ筆癖を持つもので、短い文言が記されている。(オ)
- 【E】 二通目は、前(一通目)の封書が「人間椅子」と題する一編の創作であることを伝えている。(ア)

以上の表(一)を見ればわかるように、ストーリー(ア)の内容はプロットにおいては【E】の部分に当たる。もし、「人間椅子」がストーリー順通りに物語が語られているのであれば、読者はすぐにその男の不思議な告白が、ただの作り話であることがわかる。そうすると、この作品のサスペンス性と面白さは完全に失われてしまう。読者に不安と未知に対する好奇心を煽り立てるために、乱歩はストーリー(ア)の部分をプロットの最後に配置した。つまり、ストーリー(ア)とプロット【E】の変換は、「人間椅子」という作品において、きわめて重要な配置である。

2.2 作中作の部分について

作中作としての一通目の書簡、作中作としての物語「人間椅子」のストーリーとプロットについてまとめたものを以下の表(二)に示しておく。

表(二) 作中作「人間椅子」のストーリーとプロット(作中作) ※筆者作成

ストーリー
(ア) 椅子を作る貧乏な一職人である〈私〉は自分の容貌及び自分自身が存在する現実を醜いと思っている。
(イ) しかし、〈私〉は胸の中に烈しい情熱を秘めているので、いつも自分の椅子に坐って、様々な夢(妄想)を夢見ている。

- (ウ) 〈私〉はその妄想世界にずっと耽溺しようとして、自分の作った椅子の中に身を隠した。
- (エ) その椅子は最初はラウンジとでもいうような部屋に運ばれた。〈私〉はそこで盗みを実行した。
- (オ) 〈私〉は椅子の中で西洋人男性、異国の乙女、強国の大使、有名ダンサーなど、さまざまな人との接触経験を通して、不思議な感触を体験した。
- (カ) ある日、〈私〉はその椅子と一緒にある立派な邸へ移された。
- (キ) 〈私〉は豪邸に住んでいる大使夫人のことが好きになり、かつてない強烈な感情に襲われた。
- (ク) そして、夫人と一度対面したいと思う気持ちから、〈私〉は椅子を出た。
- (ケ) 〈私〉は夫人に自分の罪と、夫人に対する愛慕を告白する手紙を出した。

プロット

- 【A】** 〈私〉は一人の女性に、自分の犯した不思議な罪悪を懺悔する。(ケ)
- 【B】** 〈私〉の身分、そして自分の容貌に対するコンプレックスについての描写。
(ア)
- 【C】** 〈私〉の椅子に対する執着、そして、心の中に秘めた烈しい情熱と、様々な妄想の描写。(イ)
- 【D】** 〈私〉が自分の作った椅子の中に身を隠した経緯。(ウ)
- 【E】** その椅子はホテルの社交室に運ばれ、〈私〉はそこで盗みを実行した。(エ)
- 【F】** 〈私〉は椅子の中で、西洋人男性、異国の乙女、強国の大使、有名ダンサーなどの人々との接触経験を通して、不思議な感触の魅力に満ちた世界に惑溺してしまった。(オ)
- 【G】** ある日、椅子はある立派な邸へ移された。(カ)
- 【H】** 〈私〉は豪邸に住んでいる大使夫人のことが好きになり、かつてない強烈な感情に襲われた。(キ)
- 【I】** 夫人に自分の存在に気付いてほしいという気持ちから、〈私〉は椅子から出た。(ク)

以上の表(二)が示すように、一通目の封書、つまり「人間椅子」というタイトルの小説はストーリーとプロットがほぼ一致していると言えよう。ストーリー(ケ)の部分の内容は、手紙の最初の描写プロット**【A】**に配置されてい

る。その内容は語り手の〈私〉が自分の犯した「罪悪」を告白した内容である。プロット【A】の部分において、〈私〉は「私は数ヶ月の間、全く人間界から姿を隠して、本当に、悪魔の様な生活を続けて参りました」(p.608)と述べている。読者はこの一文を読んで、いくつかの疑問を思い浮かべたことだろう。例えば、「罪悪」という言葉である。手紙の差し出し人が犯したのは盗みなどの軽犯罪なのか、あるいは殺人や傷害などの凶悪犯罪なのか、疑問が生じるに違いない。

次に、「人間界から姿を隠して」、「悪魔の様な生活」という告白であるが、男はどこに隠れているのか、そして悪魔のような生活とはどんな生活なのかという疑問も生じるはずである。また、その男は「懺悔しないではいられなくなりました」(p.608)と告白している。しかし、その男の罪は本当に懺悔すれば許されるものなのだろうか。

読者は本文を読み進めていくうちに、真相を追求しようとする好奇心が喚起されることだろう。要するに、時間的順序からして後の出来事であるストーリー(ケ)をプロットの最初に移したことにより、いくつかの問題点があらかじめ読者に提示されていると言えよう。

3. 日本近代「探偵小説」の構成要素

3.1 「探偵小説」の構成要素について

日本における「探偵小説」の誕生とその定義については第1章「江戸川乱歩の「探偵小説」—ジャンル論からのアプローチ—」で述べた通りであるが、今では日本の「探偵小説」はさらにさまざまな内容を取りこんで多様なスタイルを展開させている。しかしどのような種類の「探偵小説」でも、その構成は基本的に一つの要素が不可欠である。それは謎の創造である。大久保典夫は「大衆化社会の作家と作品Ⅴ純文学と推理小説」において推理小説の要素を次のように説明している。

木々高太郎の〈探偵小説芸術論〉を要約すると、謎・論理的思索・解決の三条件を具備すべき探偵小説は、その形式が完備すればするほどすぐれた探偵小説であって、同時に芸術小説である⁶。

⁶ 大久保典夫『大衆化社会の作家と作品』、至文堂、2006年、p.86。

しかし、この点について、乱歩自身は、次のように異なる見解を示している。

私は探偵小説の面白さの条件として、出発点に於ける不思議性、中道に於けるサスペンス、結末の意外性の三つを挙げる⁷。

高太郎と乱歩の主張を比べてみると、最後の結末について乱歩は、事件あるいは謎が必ずしも解決されなくてもよいと考えている。意外性の要素を持つ作品なら、「探偵小説」のジャンルにも属しているというのである。

つまり、本格、変格を問わず、「不思議性」「サスペンス性」「意外性」をもつ作品ならば、「探偵小説」と称することが可能である。次の節では乱歩の「探偵小説」の構成要素についての定義に従って「人間椅子」の構成を分析してみたい。

3.2 乱歩定義の検証—外枠の部分について

「人間椅子」のプロットを整理したものと表（一）と表（二）にまとめたが、ここでは表（一）をもとに、乱歩の定義にしたがって「人間椅子」の外枠の部分を検証してみたい。

外枠の部分について、第3.1節で述べた通り、そのプロットは物語の不思議性を深めるために配置されているという結論に達した。そして表（一）のプロット【B】と【C】の内容にはいくつかの伏線が張られている。例えば、その男の罪悪とは何か、また彼がその封書を書く目的などである。そして最後にプロット【D】と【E】において全部の謎は明されたが、その驚愕な内容をもつ一封目の手紙が、実はただ一つの創作小説であることが「人間椅子」における結末の意外性なのである。

要するに、乱歩が提唱した「探偵小説」の三要素は「人間椅子」という作品にもあてはめることができるのである。「人間椅子」の外枠の部分の発端プロット【A】は不思議性が富み、またプロット【B】と【C】にサスペンス性が含まれている。そして最後のプロット【D】と【E】は意外な結末を用意している。以上の構成をプロットの的に分析したものを表（三）として提示しておく。

⁷ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、光文社、2003年、p.23。

表（三）「人間椅子」の構造分析（外枠）

※筆者作成

「探偵小説」の 三要素	表（一）のプロット
発端の不思議	【A】 ある男が大使夫人・佳子に一通の封書を送った。
中道のサスペンス	【B】 その封書には、驚くべき行為の告白が書かれている。 【C】 その封書の中に出てくる夫人が自分であることを知り、佳子は驚愕した。
結末の意外性	【D】 佳子のもとに二通目の封書が届けられ、それは前の一通目の封書と同じ筆癖を持つもので、短い文言が記されている。 【E】 二通目は、前（一通目）の封書が「人間椅子」と題する一編の創作であることを伝えている。

3.3 乱歩定義の検証—作中作の部分について

作中作の部分は、第3.2小節で述べた通りであるが、ここでは「探偵小説」の三要素に対応する作中作のプロットをまとめて、表（四）として以下に提示する。

表（四）「人間椅子」の構造分析（作中作）

※筆者作成

「探偵小説」の 三要素	表（二）のプロット	
発端の不思議	【A】 〈私〉は一人の女性に、自分の犯した不思議な罪悪を懺悔する。	
中道のサスペンス	第1層	【B】 〈私〉の身分、そして自分の容貌に対するコンプレックスについての描写。 【C】 〈私〉の椅子に対する執着、そして、心の中に秘めた烈しい情熱と、様々な妄想の描写。 【D】 〈私〉が自分の作った椅子の中に身を隠した経緯。

		【E】 その椅子はホテルの社交室に運ばれ、〈私〉はそこで盗みを実行した。
	第2層	【F】 〈私〉は椅子の中で、西洋人男性、異国の乙女、強国の大使、有名ダンサーなどの人々との接触経験を通して、不思議な感触の魅力に満ちた世界に惑溺してしまった。
	第3層	【G】 ある日、椅子はある立派な邸へ移された。 【H】 〈私〉は豪邸に住んでいる大使夫人のことが好きになり、かつてない強烈な感情に襲われた。
結末の意外性		【I】 夫人に自分の存在に気付いてほしいという気持ちから、〈私〉は椅子から出た。

まずプロット **【A】** の配列は外枠の部分と同様に、不思議性を深めるための配置である。そして、プロット **【B】** から **【E】** までは、〈私〉が自分の境遇と体験を述べる内容であり、さらに椅子に隠れる理由と盗みの実行経緯も詳しく記されている。しかし〈私〉は、盗みよりも重要なことに気付いたが、その場面について次のような一節がある。

でも、私は今、残念ながら、それを詳しくお話している暇はありません。私はそこで、そんな盗みなどよりは、十倍も二十倍も、私を喜ばせた所の、奇怪極まる快楽を発見したのでございます。そして、それについて、告白することが、実は、この手紙の本当の目的なのでございます。(p.617)

椅子に隠れるという発想は普通、誰も思いつかないことだろう。まさに奇想天外の行動ではあるが、以上の一節があるように、〈私〉はほかの快楽を発見したのである。椅子に隠れることよりも「十倍も二十倍も」怪奇な快楽という描写が、物語のサスペンス性を一層際立たせている。

次にプロット **【F】** においてその快楽の実体が、人々との接触による快感であることが明されている。

その他、私はまだ色々と、珍しい、不思議な、或は気味悪い、数々の経

験を致しましたが、それらを、ここに細叙することは、この手紙の目的ではありませんし、それに大分長くなりましたから、急いで、肝心の点にお話を進めることに致しましょう。(p.624)

もともと読者はプロット【F】まで読むと、椅子を通して人々と接触した異様な快感を描くことが手紙の目的であると考えるに違いない。しかし、以上の一文まで読むと、それが手紙の目的ではないことが示され、それでは〈私〉の本当の目的は何だろうという疑問も自然に出てくるはずである。これは第二層のサスペンスと言える。

プロット【A】において手紙の差し出し人が、大使夫人、つまり佳子に対する懺悔をするために手紙を書いたと述べられているが、なぜ懺悔しなければならないのか、〈私〉はまだ説明していない。次のプロット【G】と【H】において、〈私〉はようやく自分の目的について以下のように告白した。

私は、出来るならば、夫人の方でも、椅子の中の私を意識して欲しかったのでございます。そして、虫のいい話ですが、私を愛して貰い度く思っただのでございます。でも、それをどうして合図致しましょう。若し、そこに人間が隠れているということを、あからさまに知らせたなら、彼女はきっと、驚きの余り、主人や召使達に、そのことを告げるに相違ありません。それでは凡てが駄目になって了うばかりか、私は、恐ろしい罪名を着て、法律上の刑罰をさえ受けなければなりません。(pp.626-627)

通報されたら、〈私〉は法律の裁きを受けなければならないが、それでも夫人に自分の存在に気付いてほしかったのである。つまり手紙の受け取り人が〈私〉の恋い憧れる相手であることがここではじめて明らかになる。しかし〈私〉はこのことを今まで伏せている。そして最後のプロット【I】に全部の謎が解かれ、真相が明される。

以上に論じてきたように、「人間椅子」の外枠と内包する部分（作中作）からは、乱歩自身が提唱した「探偵小説」の三要素を見出すことができる。「人間椅子」は作中作という二重の構造を使い、サスペンス性を強く打ち出している。そして二つの構造の結末部にはそれぞれ意外性が用意されている。その意外性

は作中作のプロット【I】と外枠のプロット【D】と【E】である。しかし作品の中核をなすのは作中作であることが明白であり、二重の意外性を作り出すためとはいえ、作中作が虚構の作品であることを、わざわざ読者に提示する必要があるか。このことについて乱歩は次のように自弁している。

『赤い部屋』にしても『人間椅子』にしても、前人未踏を心掛けるの余り、内容が荒唐無稽で、出来相もないことで、それが一そ幻想的な小説ならいいのだけれど、やっぱり写実的に書く方が面白いものだから、内容の荒唐無稽と、書き方の写実との間に、どうしても無理が出来る。実際あったこととして書放して置くのが、作者にはどうしてもやましいのだ。そこで、仕方がないので、あれは嘘だったという結末をつけて、やっと写実を徹底させる⁸。(傍点原文)

以上の自作解説をみると、「人間椅子」は幻想的要素の強い作品である分、現実味に欠けている。それで物語のリアリティを創り出すために乱歩は「人間椅子」を一篇の創作小説として扱い、外枠の物語を考案したのである。このような幻想と写実の調和は乱歩作品の独特の持ち味といえよう。

このように乱歩は「人間椅子」の外枠の部分と作中作の部分を巧みに結びつけさせ、「発端の不思議」「中道のサスペンス」「結末の意外性」を意識しながら、ストーリーを展開させていくことがわかる。

おわりに

この一節では、「人間椅子」における構造分析をめぐって、ストーリーとプロットの分析を通して、「探偵小説」の三要素を検証してみた。

まず外枠の部分であるが、乱歩は三人称の語り手を使って、序盤にこれから展開するのが不思議な話であるということを読者に予告している。また、書簡体の語りを利用して、内的焦点化を通して、読者に登場人物への感情移入を促している。そして作中人物の心境と同化した読者は、緊張と恐怖を感じながら、物語にのめり込んでいく。作中作の部分についてであるが、特に触覚の描写に中心が置かれているので、よりその語り手の微細な心理変化を語る事ができる。

⁸ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第24巻 悪人志願』、光文社、2005年、p.601。

次に、乱歩はこの作品にもう一つの物語を内包するという「作中作」の手法を使い、作品に意外性を持たせた。そして外枠の部分と作中作である「人間椅子」の部分には、それぞれ物語内時間の変換がなされている。未知に対する好奇心を煽りたて、サスペンス性をより強く打ち出すためである。

「人間椅子」の外枠の物語と内包する物語の二部構成に乱歩自身の定義する「探偵小説」の三要素を見出すことができる。そして二層構造の結末から意外性が感じられ、また幻想的な雰囲気醸しながら最後はリアリティーのある世界へと物語は戻される。このように幻想性とリアリティーを融合した独特の構造が「人間椅子」の最大の魅力と言えよう。

